



官能人肉食小説

「ブラックムーン」

大黒達也

『ブラックムーン』

作者 大黒達也

一・あらすじ

完全武装した銀行強盗団が、新宿にある都銀を襲撃した。軍隊同様の装備を有する彼らの前に警察は為すすべが無く、十億円の現金と数名の人質を奪われる。人質は皆、容貌肢体が整った美女達で、全裸にされ何処へとも無く連れ去られる。

彼らに果敢に立ち向かうのは、警視庁に特設された特別対策室のメンバーである。メンバーは皆女性で、彼女達を率いるのは警視庁きつての美女であり、凄腕を誇る工藤真弓であった。謎の銀行強盗団と警視庁のアマゾネス軍団¹によって、東京を主要舞台として戦

闘が繰り広げられる。彼らの正体は、またその真の目的は何なのか……。

二・登場人物

工藤 真弓（クドウ マユミ）

警視庁公安部外事一課警視、警視庁一の美しい容貌
肢体を持ち、テロリストを単身で殲滅させる凄腕の持
ち主

後藤 瞳（ゴトウ ヒトミ）

警視庁公安部公安課警部、顔立ちも目鼻立ちがくっ
きりとした美人。数か国語の外国語をマスターしてい
る。

白石 美由紀（シライシ ミユキ）

警視庁航空隊所属役職は警部、ヘリの操縦にかけては警視庁内で並ぶものがない。

木下 真理子（キノシタ マリコ）

警視庁科学調査課警部、格闘術が得意であり、真弓と互角の勝負ができる警視庁唯一の女性だった。

少佐（シヨウサ）

謎の銀行強盗団の首領、強力無比な戦闘能力を有する

アリサ

謎の銀行強盗団の女戦士、残虐な性格と美貌の持ち

主

三・目次

第一章 強奪

第二章 真弓

第三章 逆襲

第四章 悪魔の宴

第五章 誘拐

第六章 少佐

第七章 真理子

第八章 攻撃

第九章 対決

第十章 復讐

『本編』

第一章 強奪

新宿歌舞伎町の東側、通称、明治通り、に面した大手都市銀行前に、黒塗りのバンが音もなく停車した。後部ドアが開き、中から七人の男達が現れた。皆、レイバンのサングラスをかけ、迷彩服に身を包み、自動小銃や軽機関銃を抱えていた。道を行く通行人達の足が止まった。直ぐに彼らのまわりに人だかりができた。

「何かのロケか？」

人々の間にざわめきが広がっていく。男達のうち二人は白人で雲を突くような大男だった。全員男に見えたが一人は女のようなようだ。屈強な男達の中で、ただ一人華奢な肢体を持っていた。長い髪を後ろに束ね赤いバ

ンダナを巻いていた。男達の一人が、空を仰ぎ、降り注ぐ真夏の太陽をサングラス越しにじっと見つめた。サングラスのせいで表情はようとして掴めない。空を見上げた男が、腕時計に視線を落とした。

「時間だ」

彼らはゆっくりと銀行のドアをめざし歩き始めた。

銀行のドアが開き、二名のガードマンが走り出てきた。

「こんなところで、ロケ等されては困るんだ。許可は取ってあるのか？」

それには答えず、女が突然、自動小銃M一六A二を二人のガードマンに向けた。

「冗談はよせ……」

ガードマンの声はM一六A二の「ダダダダダ……」

という連射音にかき消された。二人の身体は至近距離からの五・五六ミリ×四五弾の連射によってずたずたに引き裂かれた。銃声が止んだときには、インターロッキングの歩道に倒れ伏していた。背中にはゴルフボール大の射出口がいくつも穿たれていた。二人の身体を貫通した弾丸は銀行のガラスドアを粉々に砕いていた。通行人達はガードマンの死体と、破砕したガラスドアを交互に見つめていた。

「本、本物だ！」

誰かが叫んだ。群衆に衝撃が走り、一斉に走り出した。車道に走り出て車にひかれる者や倒れた者を踏みつけていく者。パニックが人々を支配していた。武装集団のまわりに人影は無くなった。彼らは何事も無か

ったように歩き出した。破碎したガラスドアを抜け、銀行内に入った。中では二十名ほどの行員達が呆然とした表情で立ちすくんでいた。十人ほどの客がいた。客達は床に伏せて頭を抱えている者、ソファに坐ったまま宙を見つめている者等様々だった。

武装集団は行員達に対峙して一列に並んだ。大男のうちの一人が軽機関銃を天井に向けて連射した。「ダダダダダ」という銃声とともに天井から小さな石膏ボードの欠片が落ち、硝煙が銀行内に立ちこめた。男達の中央にいた一人が片腕を上げた。銃声が止んだ。女子行員があげるすすり泣き以外何も聞こえなかった。片腕を上げた男は、首謀格らしく落ち着いた表情をしていた。短く刈り上げた髪型で、浅黒く引き締ま

った顔立ちをしていた。身長は百八十五センチメートル程でがっちり引き締まった筋肉質の体型をしていた。武装も他の者達よりは軽装で、ウーヂサブマシンガンを肩に掛けている程度だ。男が口を開いた。

「この銀行は我々が占領した。代表者は十秒以内に出てくるように」

店の奥から初老の男がゆっくりとした足取りで出てきた。

「……支店長の大隅です。……どうか手荒な真似は止めて下さい」

首謀格の男が、仲間の一人に目で合図を送った。身長百八十七センチメートルでやせ形の男が前に出て、窓口にいた女子行員をカウンター越しに引きずり出した。

震えて泣き叫ぶ女子行員の前身をカウンターに伏せさせ、片手で、背中に組ませた両手を掴んで押しつけた。もう一方の手で女子行員のパンティストッキングを力まかせにむしり取った。むっちりとした尻の膨らみを白色のパンティが覆っていた。男はパンティをゆつくりとおろしていった。剥きタマゴのような白い尻が丸見えになった。男は舌なめずりをしながら、片手で尻を撫で回した。アヌスに指を根元まで差込掻き回した。そして、腰のホルスターから自動拳銃を引き抜き、銃口を女の剥き出しになったアヌスに当てた。デザートイーグル三五七マグナムだ。装弾数九発、対人用としては威力がありすぎる。男が口を開いた。妙に高いトーンだった。

「十秒やるから、金の在処に案内しな。言うことを聞かないと、この女の尻は吹っ飛ぶことになるぜ」

「……」

「一、二、三」

突然「ダーン」という乾いた銃声がして、女子行員の身体が一瞬逆海老剃りになり、カウンターに突っ伏した。身体は小刻みに痙攣し、太腿から真っ赤な鮮血が滴り落ちた。

「しまった。指がすべっちゃまった」

男が放った銃弾は女子行員のアヌスを抜け、内臓を破壊していた。男が女子行員の背中に組ませた腕を放すと、床にゆつくりと倒れ伏した。既に絶命していた。

支店長の大隅がその場にへたりこんだ。

「わ、わ、わかりました。金は地下金庫の中です」

首謀格の男が、顎の先で先ほどの男に合図を送った。

男はそれを受けて、カウンターを飛び越え、支店長に近付いた。

「さっさと立ち上がれ。この糞爺！」

男が支店長の大隅を汚く罵った。大隅はふらふらと立ち上がった。身体中の震えを隠すことができなかつた。

「金の場所に案内するんだ」

大隅と男は奥に向かって歩き始めた。その時、複数のパトカーのサイレンが、聞こえてきた。音は銀行を指しているように刻一刻と大きくなっていく。首謀格の男が、白人の大男に向かって命令した。

「片づけろ」

大男はもう一人の白人の大男に目で合図し、二人で行内から出ていった。二人は銀行の前で立ち止まった。数十台のパトカー集団は、銀行から百メートルのところまで接近していた。一人が、肩から下げたDVDプレーヤーのスイッチを押した。七十年代に流行ったハードロックがけたたましく流れ出した。

もう一人はガムを噛みながら、抱えていたFN Mニ四九ミニミ機関銃を先頭車に向け、引き金を引き絞った。「ダダダダダダ」という連射音とともに先頭車のフロントガラス、ボンネットが打ち抜かれた。先頭車は横向きになり横転し、そこに後続車がフルスピードで突っ込んだ。ドーンという衝撃音とともに爆発炎

上した。続く数十台のパトカーが道を塞がれ立ち往生した。

「やたっぜ」

「最高だな」

DVDプレーヤーを持っていた男は肩に掛けていた六連発の南アフリカ製四十ミリグラネードランチャーMGLを後続車に向けて連続的に発射した。「ボーン、ボーン、ボーン」という爆撃音がして、数台のパトカーが吹き飛んだ。

「死ぬ。皆死んじまえ！」

生存者達が、火だるまとなって路上に飛び出した。機関銃が火を噴き容赦無く、銃弾を犠牲者に撃ち込んでいく。四十ミリグラネードランチャーを発射してい

た男も、機関銃に切り替えた。二丁の銃口から吐き出される必殺の五・五六ミリ弾が、通行人も含め動く者を殺戮していく。頭蓋骨を打ち抜かれ、脳味噌をまき散らす者や膝から先を撃ち抜かれ腹這いになり逃げ延びようとする者達の断末魔が交差していた。辺りには、空葉きょうが乱れ飛び、硝煙が発ち込めた。男達は殺戮を楽しんでいた。五分と立たない内に彼ら以外、動く者はいなくなった。彼らの近くには、近くのビルから出てきたところを撃たれた二人のOLが、瀕死の重傷を負い路上に横たわっていた。

「牝豚が二匹転がっているぜ。どうする？」

相棒の問いに対し、もうひとりの男が首を掻ききる真似をした。二人の男は、女達をうつ伏せにして、ス

カートを脱がせ、パンティを剥ぎ取った。

「処刑を開始する」

二人はガムを噛みながら、白く盛り上がった尻の膨らみに拳銃を向けて乱射した。女達の身体が小刻みに震え、鮮血が飛び散り、尻は挽肉のようになった。

破壊された乗用車の影に、一人の若いOLが逃げ遅れ、蹲り震えていた。男のひとりが、機関銃を構えながら近づき命令した。

「着ている物を全部脱げ！」

女は恐怖のあまり口が聞けず、震えるばかりだった。

「ちえっ。しょうがないな」

機関銃を近くの路面に置き、女を仰向けにして、衣服を戦闘用ナイフで引き裂き始めた。手際よく裸に剥い

た。四肢が長く、なかなかの美人だった。豊かな乳房を持ち、抜けるような白い肌をしていた。閉じ合わされたむっちりとした太腿を押し開き、股間を覗き込んだ。若草を思わせる匂いがした。男は両太股を持ち上げ、女の身体を海老剃りの姿勢に折り曲げ、股間を剥き出しにした。

鮮やかなサーモンピンクの膣が口を開けていた。尻の深い割れ目にこれもサーモンピンクのアヌスが生きづいていた。男は黄色く濁った目で女の性器をじっと見つめた。

「お前の貝を喰らってやろうか？ベイベー」
膣とアヌスに、交互にむしゃぶりつき、ががつと歯を立てた。若い女の愛液は素晴らしい味がした。泣

き叫び、命乞いをする女を腹這いさせ、白く盛り上がった尻の合間に巨大な男根を擦り付けた。そして、アヌスにいきなり挿入し、激しく腰を動かした。アヌスを引き裂かれる際、苦痛に満ちた絶叫が響きわたった。男は、しばらくして獣のような咆哮を上げ、放出した。

ぐったりと横たわりすすり泣きを続ける女に、四つん這いの姿勢をとらせた。コルトパイソン三五七マグナムを、裂傷のため出血しているアヌスにあて、引き金を絞った。女は路面に突っ伏し、一瞬全身を激しく痙攣させ動かなくなった。女の腹部から真っ赤な血がアスファルトの路面にじわじわと流れ広がっていった。

その頃、行内では、強盗団の中でただ一人の女戦士が女子行員達をフロアの中央に集めた。十数名の中から容姿端麗と思われる女を選別していった。女の眼鏡にかなったのは三人だけだった。三人とも目鼻立ちがはっきりとしており体型も中肉中背で、グラマーな女達だった。

「お前。お前だよ。ぼやつとしていないで服を脱ぐんだよ」

一人の胸倉を掴み、制服のスカートを力まかせに引っ張った。プチンという音がしてホックが外れ、その女の豊かな下半身が露になった。切れ端のような黒のパンティが卑わいな感じを引き立てていた。

「いい趣味してるじゃないか」

笑いながら女のパンティに手をかけて一気に引き裂いた。女は恐怖と羞恥心のためか、ぶるぶると震え、俯むいたまま顔を上げようとしなかった。股間の恥毛が柔らかそうだ。

「尻を見せな。早くしないか！」

女戦士は黙ったまま動こうとしない女の鳩尾に蹴りを入れた。まともに蹴りが入り女は腹を押さえ床にうつ伏せに倒れた。豊かな真白い尻がむき出しになった。

「世話をやかせるんじゃないよ。さあ、今度はカウンターの上で四つん這いになるんだ」

女戦士は、拳銃で女を威嚇し、カウンタの上に上がるように指示した。女は虚ろな表情で椅子を足場にし

てカウンターに上がった。うつ伏せになった女の尻の合間に手を入れた。最初、臆に一差し指を入れた。締まり具合を確認しているようだ。次にアヌスに一差し指を根本まで差し込み中をかき回した。女の身体が激痛のためかビクンと跳ねた。女の口からさめざめとした嗚咽が流れた。女戦士は指を抜き、匂いを嗅いだ。

「いい女は、ウンチまでいい匂いだよ」

女戦士はその指を女の口に入れた。

「きれいにしておくれ」

女はカウンターの上で夢遊病者のように起きあがり女戦士の指をくわえた。空いた方の手で女の制服の上着をはぎ取りブラウスのボタンを外しにかかった。ブラウスを脱がせ、ブラジャーに取りかかった。す

ぐに豊かな胸の膨らみが露になった。女の口から指を
引き抜き、両肩を掴み仰向けに寝かせた。女戦士は一
糸もまとわぬ女を再びうつ伏せに横たえ、むき卵のよ
うにすべすべの尻を両手で押し広げアヌスを舐り始
めた。行内に女のさめざめとした啜り泣きが漏れた。

るようにして、唇を重ねた。

今度は、カウンターの上で仰向けにして、覆い被さ



「もつと、股を開きな」

指を女の膺に入れかき回しながら、舌を吸い出ししゃぶり始めた。女の舌に満足したのか、首筋を舐めあげ、次に乳首にむしゃぶりついた。しゃぶりそして乳房に思いつ切り歯を立てた。

「ギャー！」

女の絶叫が行内に響いた。乳房には歯形がくつきりと刻まれ、血が滴り落ちた。女戦士は流れる血を口に含み味わうようにして飲み込んだ。ほんの一瞬、女は怨念のこもった目で女戦士を睨み付けた。

「何だよ。その目は？あたいに文句でもあるのかよ」

「……いえ。何でもありません」

女の口から蚊の泣くような声が漏れた。

「遅いんだよ」

女戦士は女をうつ伏せに寝かせ、真っ白い尻の膨らみを力任せに噛んだ。また女の口から絶叫が洩れた。

女は恐怖と苦痛のあまり小水を垂れ流していた。

女戦士は尻の膨らみから顔を放し、腰のホルスターから拳銃を引き抜いた。軍用拳銃ベレッタ M九二F Sだ。口径九×十九ミリメートルを発射する高性能な自動拳銃だ。間髪を入れず女のアヌスに銃口をねじ込んだ。女はアヌスを引き裂かれるあまりの苦痛のためか、逆海老剃りになり長い手足をばたつかせた。

「あ・ば・よ」

冷たい笑みを浮かべながら引き金を引いた。「ダーン」という乾いた銃声が響き、女の身体がピクンと跳

ねた。次に白目を剥き横たわった。フロアに大量の血が流れ、死の痙攣が全身に伝わっていった。女戦士は銃身を血塗れのアヌスから引き抜き、死の痙攣を続ける女の身体を右足でひっくり返した。胸に大きな射出口ができていた。アヌスから入った弾丸は腹部を通り、胸から抜けたらしい。

女戦士はゆっくりとした動作で残る二人の女に向き直った。女達は我先に制服と下着を脱ぎ捨て全裸になった。そしてカウンターの上で四つん這いの姿勢になり女戦士に尻を向けた。

「お前達は物わかりがいいね。きっと長生きできるよ」

二人の女に近づき、尻に顔を近づけ匂いを嗅いだ。

真っ白くシミ一つ無い尻の双球に舌を這わせた。暫く尻の感触を味わった後に首謀格の男に視線を向けた。

「少佐、今日の獲物は上物だ……」

少佐と呼ばれた男の視線は、フロアの隅に伏せ、震えていた客達に注がれていた。その中の一人は、はつと目を引くような色白の美人だった。肩まで伸ばしたセミロングヘアに、切れ長の大きな二重瞼、鼻筋のとおった女優でも通用するような顔立ちをしていた。

「チエツ！」

女戦士が舌を鳴らした。そして続けて、

「伍長。あそこで震えている女をここに連れてきな」

と言った。身長百七十センチ位でガッチリとした猪首の男が小走りで、その女に近づいた。男は両腕を女の

腰に回し、抱き上げ軽々と肩に載せ上げた。尻を摩りながら、カウンターに近づき、仰向けに寝かせた。男は、花柄模様のワンピースに両手をかけ、一気に引き裂いた。女の悲鳴が行内に響きわたった。それにはかまわず、ストッキングをむしり取り、せわしげにピンク色のブラジャーとパンティを紙のように引き裂いた。形のいい乳房が、露になった。閉じあわされた太股の付け根には柔らかかそうな恥毛がはみ出していた。身長は百六十五センチ以上、胸も尻も豊かだった。肌は抜けるように白く尻は剥きタマゴのように滑らかだ。猪首の男は、女の太股を広げ、合間に顔を入れ舌で舐り始めた。ピチャピチャという音が聞こえてきた。女は顔を両手で覆い、すすり泣きの声を上げた。女戦

士が、女の右乳房を右手でこね回した。

「メインディッシュが決まったようだね」

少佐と呼ばれた男が大きく頷いた。

「若い男はいいのか？」

「待って。今捜しているところなのよ」

女戦士が、行内を見回した。客達の中に二十代後半のサラリーマン風の男を見つけた。男は壁に凭れるようにして佇んでいた。強盗団と視線を合わせないためか、足下をじっと見つめていた。男は長身で、百八十五センチ近くあり、引き締まった体格をしていた。女戦士は男の前に立った。

「へえ。なかなかいい男じゃないか」

女戦士は男を見上げるようにして、独り言を言った。

「おい。お前。服を全部脱ぎな。早くしろ。アヌスを打ち抜かれないのか」

「助けて下さい」

女戦士は拳銃を腰のホルスターから引き抜き、男の喉元に突きつけ、トリガーに指をかけた。男は無言で、ぶるぶると震えながらズボンのベルトを外した。女戦士は苛立ちの表情を浮かべ、男のズボンに手をかけ一気に引き下ろし、チェックのトランクスをおろした。膝を付き、縮こまった男根を口に含んだ。男の尻に両腕を回し、勃起した男根を喉の奥まで飲み込んだ。顔を激しく前後に動かした。時折、ジュルジュルという、男根を吸う音が聞こえた。右手の人差し指を男のアヌスに深々と差し込み中をかき回した。左手は男の太股

を這い回っていた。女戦士はその姿勢で数分間、口腔性交を行った。男は「うっ」と呻いて、女戦士の髪を驚掴みにし、果てた。女戦士は一滴も漏らすまいと、男根を強く吸引した。

「美味しかったわ」

女戦士は、手の甲で口元を拭いながら、男から離れた。男はへなへなとその場に座り込んだ。その時、行内の奥から、ジュラルミンのケースを積んだ台車を押す支店長の大隅と、強盗団の一人が現れた。

「十億あるぜ」

男の声は弾んでいた。少佐と呼ばれた男が右手をあげ、

「撤収する」

と言った。女戦士は、自分が陵辱した男に銃を突きつけ、立ち上がるように促した。そして立ち上がった男のネクタイを引っ張りながら表に出た。先ほどの猪首の男が、カウンターの上で、震えていた女達二人を両肩にのせ、出口に向かった。少佐と呼ばれた男が、カウンターの上で仰向けに寝かされていた女に近づき抱き起こした。女の目をじっと見つめ唇を強引に奪った。そしてふらつく女の手を引いて出口に向かった。

第二章 真弓

七月十日、東京都千代田区永田町にある総理官邸の一室。大客間と呼ばれる各種閣僚会議用の部屋に、三

人の男たちが渋い表情で打合せを行っていた。

部屋の中央に置かれた数十人掛けの会議用テーブルで、膝を付きあわせるようにして話していた。その上席に座った一人は、小柄な体躯にメガネをかけた首相であり、その両サイドには、警視庁長官と警視総監が座っていた。二人とも首相と違い、上背がありがちりとした体格の持ち主だった。先ほどから二人の説明を無言で聞いていた首相が口を開いた。

「調査中だと。何を呑気なことを言っているんだ。民間人も含め死傷者が百人以上、破壊された警察車両二十三台、強奪された現金が十億、それに三人の人は行方不明だ。状況を理解しているのか？」

「お言葉ですが、あの銀行強盗団の装備は、軍隊のも

のです。とても警察が所有する武器では歯がたちませ
ん」

警視庁長官が額の汗を拭きながら答えた。

「だからどうしたと言うんだ。これは警視庁始まって
以来の危機的状況なんだぞ。いや今回の事件には国民
全体が高い関心を示しているんだ。内閣とてどうなる
かわからん」

「ですから、対策を検討していまして……」

「うるさい！警視庁に人はおらんのか？……そうだ
あの男はどうした？確か警視庁で死に神と呼ばれた
男がいたな」

警視総監が顔を上げた。

「片桐のことですか？」

「そうだ。片桐とか言ったな。そいつはどうした？」

「まことに残念ですが、彼は事情がありまして都内の病院で植物状態になっています」

「何……」

警視総監の説明を聞いた首相は持っていた火のついていないタバコを握り潰した。

「他にはいないのか？」

「ひとりおります。体術等の格闘技では片桐にひけをとりますが、射撃の腕では片桐と同等かそれ以上と言われています」

「名前は？」

首相がメガネに右手をかけ前にのり出した。

「警視庁公安部外事一課所属、工藤 真弓といいま

す」

「真弓だって。九の一か？」

「……女と言っても、単身でテロリスト集団を殲滅させるほどの凄腕の持ち主です」

「ふむ……。今すぐその女をここに連れてこい」

首相が腕組をした。

「それが、勤務先の中東から休暇をとって帰国しているのはわかっているのですが、連絡がつかない状態なのです」

「ばかもん。どんな手段をとってもかまわん。ここに連れてくるんだ。二度目が起きたら取替えしがつかないぞ」

首相の怒声に、警視総監の大柄な体が一回り小さく

なった感じがした。

新宿で強盗事件が発生する前日、真弓は新宿歌舞伎町にあるショットバーで、一人グラスを傾けていた。飲んでいるのは琥珀色をしたブランデーベースのカクテル、サイドカーだ。服装は、太股までスリットが入った黒のタイトスカートに、胸の谷間が見える黒のシャツを着ていた。髪はソバージュにし、肩までおろしていた。カウンターの正面は鏡張となっており、そこに写る自分の姿に内心苦笑していた。

これでは、見方によっては娼婦に見えなくもない。いや今日の真弓の気持ちは娼婦と変わらないだろう。ただし、真弓は金には興味が無い。今はただ、無性に

男に抱かれたかった。それも普通の男ではなく、裏社会で生きる男達にだ。

工藤真弓、警視庁公安部外事一課に所属する警視だ。警視と言えば軍隊では中佐クラスの高級幹部だ。二十代の若さでこの地位につくのは異例の早さと言えた。

一週間ほど前までは中東にある某国で諜報活動を行っていた。一年越しの仕事にかたがついたので、一週間の休暇を取り日本に帰っていた。砂嵐が日常茶飯事である国には飽き飽きしていた。日本のじつとりと汗ばむような高湿度の夏に恋いこがれていた。帰ってきてはみたが親しい友人は、皆、結婚し家庭を持っていたので会うのが億劫だった。深い関係を持った男友達もいなかった。だからといって真弓に女性としての魅

力が無いわけではない。細面の顔に二重の切れ長の目を持ち、鼻筋はすつきりととおり、ミス日本でも通用するような美人だ。スタイルも抜群で、乳房や腰も十分に豊かだった。両足がすらりと伸びており腰の位置が驚くほど高い。長身で身長百七十センチはあった。年齢は二十六歳、女としては脂が乗り始める歳だ。

真弓は先ほどから背後に視線を感じていた。「かかったわ」と内心でほそく笑んだ。ゆっくりとした動作でストールを回し、振り返った。ボックス席にカジュアルなスーツを着込んだ二人組の男達が、雑談をしながら真弓の方を見るとは無しに見ていた。そのうちの一人と目が会った。真弓は軽く会釈を返した。男は、待っていたといわんばかりに席を離れ、真弓に近づい

た。真弓の隣の空いているスツールを指さし、「ここ空いていますか？」と言った。

「どうぞ」

真弓は小さく頷いた。いつの間にかもう一人の男も隣のスツールに腰掛けていた。真弓は二人の男達に両側を挟まれた。男達の一人は浅黒で目つきが鋭く、一目で筋者と知れた。もう一人はモデルといってもおかしくない優男だった。二人ともまだ二十代前半といったところだ。

「この店は初めてなの？」

優男がグラスを見つめながら、聞いてきた。

「ええ……友人と待ち合わせしていたんだけど、急用ができて一人で飲んでいたの」

「友人って、男友達？」

真弓はヤクザ風の男の方を向いた。どちらかという
と優男より好みだった。

「そうよ」

「へ……そいつは罰当たりな奴だ。こんな、すげ、いや美人をひとりしておくとはね」

「……」

真弓が軽く微笑んだ。

「おいマスター。この店で一番高級な酒をこのお嬢さん
に注いでくれ」

男の声は上擦っていた。最高の獲物を目の前にして
興奮気味のような。その店を出たのはそれから三十分
後くらいだ。真弓は先ほどの男たちに両脇を抱えられ

るようにして歩いていった。真弓は酒に酔いつぶれた女を演じていた。

「恵子さんだったね。場所をかえて飲み直そうや」

真弓は偽名を使っていた。小さくうつむいて下を向いた。

「一樹この女完全に酔いが回っているようだぜ」

やくざ風の男が優男に声をかけた。

「ああ。完全にな。後はやりたい放題だぜ。車を呼びな」

やくざ風の男が、真弓の右脇を抱えながら、胸ポケットから携帯電話を取り出しダイヤルした。ツーツという呼出し音の後、すぐにつながった。

「大内だが。車を回してくれ。今日の獲物は最上級だ」

車は五分も立たずに三人の前に止まった。ワンボックスカーだ。運転席と助手席に一人、それに後部座席に一人、計三人が乗っていた。後部ドアが開けられ、真弓を中に押しこんだ。車内に乗せる時、真弓のスカートが自然に捲りあげられ魅力的な太腿が丸見えになった。思わず大内が口笛を吹いた。

「たまらねーや。もうおっ立ってきやがったぜ」

全員が乗り込むと、車は静かにスタートした。後部席のシートは倒されフラットになっていた。真弓は男たちに囲まれ、うつ伏せの姿で寝かされていた。カーテンが閉められ外部からは中の様子はわからない。優男の一樹が真弓のスカートに手をかけ、一気に引き降ろした。豊かに盛り上がった尻の膨らみが、男たちの

両目を貫いた。一樹はパンティストッキングを引き裂き、黒のパンティに手をかけゆっくりと引き降ろした。染み一つない真っ白な尻の双球が現れた。男たちの生唾を飲む音が聞こえた。

「たまらねえや」

一樹は真弓の深い尻の割れ目に顔を伏せ、アヌスに舌を差し込んだ。真弓は堪らず「うっ」と言う喘ぎ声を漏らした。他の男たちが一斉に動き出した。すぐに真弓のシャツがはぎ取られ、黒のブラジャーが引き裂かれた。着ているものはすべて取り去らせ全裸にされた。一樹はあいも変わらず真弓の尻の膨らみに夢中になっていた。

「一樹。いい加減にしろよ。俺達はいいつのオツパイ

も拝みたいんだぜ」

大内が一樹に声をかけた。一樹が顔を上げた。自らの唾液で顔が濡れていた。

「わかったよ」

いく本もの手が出て、真弓の体は仰向けにされた。寝ているのに胸の膨らみは見事に隆起していた。男たちのひとりが右乳房に吸い付き音を立てて吸い始めた。大内が一樹を押しつけ、股間に顔を近づけた。ペンシルライトを手にし、股間を覗き込んだ。指で褌を押し開いた。きれいなピンク色の膣が見えた。大内はそこに舌を差し込みかき回した。若い女の愛液は素晴らしい味がした。舐めても、舐めても、どす黒い欲望

の渦は消えなかった。

真弓は既に限界だった。胸に吸い付いている男の頭を両腕で抱き、大内の頭を太腿で締め付けた。いつしか唇にも男の舌が入り込んでいた。快感のあまり、真弓は、絶頂を迎えていた。背中を逆海老剃りにし、湧き上がる快感の波に吞まれていった。

一回目の絶頂を迎え、休む間も与えず、大内が真弓に覆い被さっていった。シリコン球を入れた亀頭を真弓の膣に挿入した。大内は強く締め付けられる快感に思わず喘いだ。真弓の空いている口にも男根が差し込まれた。生臭い刺激臭が口内に広がったが、膣内を刺激する大内の男根に、すべてを忘れ快感の波に引きずられていった。舌先で亀頭を舐った。

誰かの指が、根元までアヌスに進入し、直腸を搔き回した。指先と膺から入った大内の男根が薄膜をとおして、擦り合わされた。快感のあまり四肢をつっぱり、鋭い喘ぎ声をはなつた。絶頂の寸前に小水が迸った。意識が深い闇の中に落ち込んでいった。

車は軽井沢に向けて県道を進んでいた。車内は真弓の裸体を巡る異様な興奮状態に包まれていた。真弓を拉致した一行が乗るバンは、明け方に軽井沢の別荘に着いた。そこは、周囲を深い森に囲まれており、道路も細く一台が通るのがやっとだった。訪れる者などいない絶好の隠れ家だ。

バンの後部ドアが開けられた。大内が真弓の手を引
き、車内から連れ出した。真弓はハイヒールをはいた
だけの全裸姿で、空いた方の手で股間を隠していた。
夏とはいえ、早朝の軽井沢の空気はひんやりとしてい
た。真弓の肌は、寒さのためか鳥肌が立っていた。車
内での男達による陵辱を思い出していた。狭い車内で
男達は何度も真弓の身体に挑んできた。何本もの男根
を口に入れられ、口腔性交を強制された。顎の筋肉が
張って重く感じられた。口からも膣からも精液が滴り
落ちていた。真弓は何度気を失いかけたかわからない
朦朧とした状態だった。周囲をぼんやりとした表情で
見つめた。目の前には白い霧に包まれた洋館風の建物
が立っていた。建坪は四十坪程だ。森がすぐ近くまで

迫っていた。

優男の一樹がドアの鍵を開け中に入った。大内が真弓を引きずるように続いた。残りの者達は、バンからジュラルミン製のケースをいくつか運び出し、それらを持って別荘に入った。別荘は、一階に居間とキッチンに寝室が一部屋で、二階は寝室が三部屋あった。バス・トイレがそれぞれの階に設けられていた。

居間では男達が、めいめいソファに座り一服していた。居間は二十帖ほどの広さで、中央にソファークエスト、そして部屋の片側には重厚な造りの暖炉が配置されていた。壁には高級な絵画が何点かかけられていた。片隅には金のかかった調度品が置かれていた。中国製の陶器も見られた。真弓は全裸のまま、ガラス製のソ

ファーターテーブルに立たされていた。

「ゆっくりと一回りするんだ」

真弓は無言で従った。

「次は自分で股を広げて全部さらけ出すんだ」

真弓は嫌々をするように首を振り、俯いたまま動かない。

「言うことを聞かないと、今直ぐ絞め殺して埋めちまうぞ」

「……わかったわ」

真弓は内股を開け、両手で膣口を広げた。淡いサーモンピンクの襞が見えた。男達の歓声が上がった。

「よし次は、前屈みになって尻を突き出し両手で割れ目を広げるんだ」

真弓は言われたとおりの格好になった。尻の合間が冷やりとした。

「綺麗な女はあそこまでピンク色だぜ」

男達の野次が飛んだ。その時、アヌスに何かを押し込まれた。それは直腸までとどき内部をかきまわっていた。鈍痛と排泄感がわきあがった。振り向くと一樹が尻の合間に手を入れ動かしていた。

「こっちの方も感度が良さそうだ。テーブルの上で四つん這いになれ」

真弓は素直に従った。一樹がズボンを下げ、目の前の真っ白い尻を両手で掴みしめた。脂身がのり、溜息が出るほど豊かな双球だった。舌を尻の割れ目に這わせ、アヌスを丹念に舐った。

「ああ。やめて。そこは。許して」

真弓は、すすり泣いた。真弓の白い裸身は、ほんのりと赤みがさしてきた。一樹は暴力に怯える女を征服することに、暗い愉悦を感じていた。十分に湿りを帯びたアヌスに男根をあてがい、一気に挿入した。真弓は直腸を突き破られるような感覚に目眩を覚えた。

「痛い。許して。死んじゃう！」

「思ったとおりだ。こっちも最高だぜ」

脇腹から回した両手で、盛り上がった乳房を揉みながら、豊かな真っ白い尻を何度も何度も串刺しにした。周りで見ていた男達は立ち上がり、真弓の重たげな乳房をこねくり回し、口に男根を挿入した。

「女は身体中が性器なんだ！」

一樹が叫んだ。

「おい。牝豚もつと腰を使いな。さもないと処分するぞ」

一樹がいつそう激しく腰を動かし、アヌスに放出した。真弓は直腸に飛び散った精液の感覚を、全身で感じていた。両手を前に突っ伏し、絶頂を迎えた。

一樹は暫くの間、余韻を楽しみ、気が済んだのか、自分の席に戻った。他のメンバーが次から次へと真弓にのりかかった。三十分ほどで一巡した。その間、真弓は二回絶頂を迎えていた。

「恵子、坐ってもいいぞ」

恵子とは真弓の偽名だ。真弓は、気だるい感覚の中、ガラステーブルの上に腰掛けた。

「一樹、これからどうするんだ？」

それには答えず、一樹は真弓の尻を見つめながら、
「俺達は裏ビデオ製作が仕事でね。あんたには主演になってもらうよ」

と言った。

「……」

真弓は俯いたまま何も答えなかった。

「一応自己紹介しておくか。俺はこの別荘のオーナーの
大和田一樹」

どうせ金持ちの親に貰ったものだろうと真弓は考
えていた。

「俺は大内敏也」

「近藤和彦」

「俺は多田芳則」

「三上だ」

五人ともまだ二十代の前半といったところだ。真弓を見る目が人を見る目ではなく生け捕りにした獲物を見る目つきだった。皆、締まりの無い顔をしていた。全員があっさりと名前を証したのは、真弓の身体を堪能した後には始末するつもりなのだろう。

「朝飯を済ませたらすぐに撮影だ。大内、恵子の身体を洗ってくれ」

大内はにんまりと笑い頷いた。三上がむっくりと立ち上がりキッチンに消えた。調理は三上の役目らしい。次に近藤が立ち上がった。上背がある。五人の中では最も長身で百八十五センチは優にあった。真弓に近づ

き裸の股間を鷺掴みにした。「うっ」といううめき声
が部屋に響いた。

「朝飯までまだ間があるよな？」

「お前まだやるのか？五回目だろう」

大内があきれ顔で近藤の顔を見つめた。

「こないいい女は初めてなんだ。抱けるうちに抱いて

おこうと思ってね」

「スキにしろや」

近藤は真弓の股間に一方の手を、さらにもう一方の
手を胸の下に差し入れて、軽々と持ち上げ一階の寝室
に消えた。寝室には中央にダブルベッドが、ひとつと
ベッド脇に木目調のナイトテーブルがひとつおかれ
ているだけだった。

近藤は真弓をダブルベッドに仰向けに寝かせ、服を全部脱ぎ捨てた。盛り上がった乳房に食らいにつき、舌で舐り回した。唾液に濡れた乳房を可能な限り口に含んだ。まるで飲み込もうとしているかのようなだった。

「あーん」

真弓が甘い声で喘いだ。それを聞いて近藤が、自分の唾液でてらてら光る顔を上げた。

「喰ってやるぞ、牝豚。お前は最高のステーキだ」

豊かに盛り上がった乳房に食らいついた。しゃぶりそして軽く歯を立てた。

「止めて。お願い。食べないで……」

真弓がすすり泣きの声を上げた。近藤はかまわず、傷が付かない程度に噛みついた。乳房に満足すると、

今度は真弓をうつ伏せに寝かせた。目の前に剥きタマゴのように白く滑らかな肌をした尻の膨らみが現れた。真弓は日本人には珍しく、西洋型の丸く豊かな尻を持っていた。肌の色つやは日本人特有のもので両者の優れた点を兼ね備えていた。尻の割れ目が深い。無毛の割れ目にはきれいなサーモンピンクのアヌスが密かに生きづいていた。膨らみに沿って舌を這わせた。素晴らしい舌触りだ。おもむろに噛みついた。出来ることなら柔肉を食いちぎり、すべてを腹に収めたかった。真弓が苦痛のうめき声を上げた。近藤は顔を上げ、両手で尻の割れ目を広げた。サーモンピンクのシミ一つ無いアヌスが露になった。深い尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを舌で舐った。素晴らしい味がした。近藤

は、興奮のあまり引きつった表情を浮かべていた。どんなに貪り喰っても、次から次へと快感の炎がめらめらとわき上がった。直腸にとどけとばかりに、深くアヌスに舌を差し込んだ。

「ああ。いい……」

真弓はしきりに喘ぎ声をあげた。しばらく、真弓のアヌスを食った後に、仰向けにし、太股を大きく開いた。きれいなサーモンピンクの膣が丸見えになった。そこは既に愛液で十分湿りを帯びていた。真弓は顔を両手で覆い、声を上げて泣いていた。近藤は、膣に舌による愛撫を始めた。右手による乳房への愛撫も忘れなかった。大陰唇を舌でかき分けクリトリスに吸い付いた。真弓に小波のような快感が湧き上がった。

「もう止めて。死んじゃう！」

ざらついた舌でサーモンピンクの膾内をかき回した。真弓は忘我の中を彷徨っていた。

その頃、居間では三上と近藤を除く残りの三人が歓談していた。

「いい女だな」

「ああ、これまでに最高だ」

「容姿、スタイルどれをとっても最高の女だ」

「撮影が終わったら、この前の女みたいに始末するか？」

大内が一樹の方を向き、尋ねた。

「ああ、顔を見られているからな。ただし、ただ殺す

だけではつまらない。俺に考えがある」

一樹は皆の顔を見渡しながら缶ビールを開けた。

「考えてっ？」

「カニバリズムって聞いた事あるか？」

「何だ、それ？」

「……人が人の肉を喰うのさ。中国では文化大革命の頃まで行われていたらしい。中国だけでは無く、世界中に記録が残っている」

「……フランスで日本人留学生がオランダ女を喰っちゃまったという話は聞いたことがあるな……。まさか、お前恵子を喰うつもりか？」

「そのまさかさ。だが、ただ喰うだけではつまらない。それをビデオにして売り出すんだ。世界中に変態野郎

はごまんという。高く売れるぜ」

「海外にどうやって持ち出すんだ？」

「税関のことか？安心しろ。インターネットを使うんだ。電子メールで送れば、誰のチェックも受けない」

「どれくらいになるんだ？」

「本物だとわかれば、一本十数万円で取引できるはずだ。

俺は世界中で数十万本は売れると思う」

「数十万だって。十万本としても一本十数万円で、一億、十億……百億だって。一人頭二十億か……。頭がおかしくなってきたぜ」

大内が頭を抱えた。先ほどから無言で二人の話を聞いていた多田が顔を上げた。

「あの女を捌いて調理するのか？鳥や豚と同じよう

に……。誰がやるんだ？俺は血を見るのが嫌いなんだ」

ふたりは一樹の顔をじつと見つめた。

「すぐにといい話じゃない。あの女の身体を厭きるまで抱いた後だ。それに通常の撮影も行う予定だ。それまで考えておく。血が嫌いなら茹で上げるか。それとも蒸し焼きでもいいぞ」

「……通常の撮影って。今回は何本撮るんだ？」

多田が話題を変えた。

「レイプ編が四本、SM編が二本の予定だ」

「あの女の浣腸姿は見物だな」

三人の高笑い声が居間に響いた。

それから一週間にわたり真弓に対する陵辱が続い

た。真弓は犠牲者を演じていたが本心では、快樂を貪っていた。男達は真弓の身体で楽しんだ。最も快樂を感じていたのは真弓本人であつたのかも知れない。レイプの犠牲者は殺されるという恐怖心が強く、とても快樂など得られないというのが常識だ。だが、真弓には生死の不安はまったく無く、その気になれば男達を一瞬のうちに片づける自信があつた。

撮影は、一日一本の割合で進められた。SM編では、放尿は当たり前で実際に浣腸されシートの上で排泄させられることもあつた。

排尿シーンでは、全裸にされた真弓が、ビニールシートを敷いた床に横たわる一樹の顔の上に跨り、一樹の口に膣を擦り付けながら放尿させられた。一樹は

嬉々として小水を口で受けた。

また、排泄シーンで真弓は、ビニールシートを敷いた床の上に後ろ手に縛られ海老剃りの姿勢で寝かされた。二人の男の手によって両足を大きく開かれ尻が高く持ち上げられていた。三脚に固定されたVTRカメラは薬液をアヌスに入れられる際に浮かべる苦悶の表情や、排泄の瞬間、アヌスがひくひくと動く様を写し続けた。まわりでは、残りの男達が締まりのない顔をして、じっと見入っていた。

強姦シーンでは、衣服を着せられ、森に放たれた。カメラマンを入れた五人の男達に、獣のように追い立てられた。捕獲され、草地の上に転がされ、衣服を乱暴に引き裂かれた。カメラマンを除く四人の男達が真

弓の身体にまわりついた。股間に顔を入れ、がつがつと性器を食う者、重たげな乳房を舌で舐める者、豊かな尻を鷺掴みにし、アヌスに舌を入れる者、口をこじ開け男根を差し込む者が入り乱れ、真弓の白い裸身は木の葉のように揺れ動いていた。真弓は獣のように犯され、意識を失うまで蹂躪された。

また、食事の際に皿がわりに使用されることもあった。世に言う女体盛りというものであった。キッチンテーブルに全裸で仰向けに寝かされ、肉や刺身や野菜等の料理を盛りつけられた。膣周辺が重点的に使用された。さらに豊かな両乳房には、デザート用として生クリームを塗られた。男達が周りを囲み、談笑しながら舌鼓を打った。刺身を膣に擦り付けて風味をつけた

りもした。生クリームを塗った乳房に、我先にと食らいついた。

撮影の合間はもちろん男達による陵辱が切れ目無しに続いた。男達は気が向けば、真弓の尻を抱いた。いつ何時も衣服を着ることは許されなかったが、食事は十分に与えられた。シャワーは一日に何度でも使うことができた。トイレに入るときでさえ、男達はついてきた。真弓の放尿や排便姿をじっと見つめていた。ウオシユレットを使ったあとにトイレトペーパーで拭くことさえ男達は嬉々として行った。プライバシー等というものは存在しなかった。寝るときは男に抱かれ、膣に男根を挿入されたまま寝た。夜中に異様な感覚を覚え、よく目を覚ました。そんなときは、決ま

って一緒に寝ていた男が、真弓の尻の間に頭を入れ、
膣やアヌスを舌で舐っていた。その後は、当然のごと
く膣やアヌスに男根を挿入され快感を掘り起こされ
た。食事の時でさえ、豊かな尻を抱えられた。男達の
真弓の身体に対する執着は異様なものがあつた。

そして一週間目の朝が来た。男達はいつになくそわ
そわしているように感じられた。真弓には今までで最
高の食事が与えられた。食後はゆっくりとバスを使わ
せてもらった。広い湯船につかり真弓は今日が、最後
の日であることを感じていた。短いバカンスだった。
バスルームを出ると、居間では既に撮影の準備が進め
られていた。一樹が真弓を手招きした。居間に敷かれ
たマットレスに真弓を横たえ、男達が次々に覆い被さ

ってきた。男達の顔には何時にもなく緊張の雰囲気を感じた。真弓は数回絶頂に達していた。

真弓が陵辱されている間、三脚に固定されたVTRカメラがすべてを映し出していた。全員が真弓の膣に欲望を吐き出した後、うつ伏せの姿勢をとらされた。

大内が真弓のアヌスを舌でなぶり始めた。そこが湿り気を帯び、十分に柔らかくなったところで、今までにない大量の浣腸液を入れられた。すぐに便意は堪えられないほど激しくなった。大内は真弓の肩を抱いてトイレまで連れていった。排泄後、バスルームで大内によって身体の隅々まで洗われた。

次に案内されたのはキッチンだった。床には隅々までビニールシートが張られており、ガスコンロには、

大釜がぐらぐらと煮だっていた。隣には大きなフライパンが火にかけられていた。キッチンの隅には三脚に固定されたVTRカメラが据え付けられていた。それはキッチンの中央にある調理用テーブルに焦点を合わせているようだ。

真弓は大内によって調理用テーブルに仰向けに寝かされた。どこに隠れていたのか、いつの間にか男達が真弓の周りを取り囲んだ。男達も全員裸だった。男達の目はぎらついており、しきりに真弓の乳房や股間に視線を注いでいた。仰向けの姿勢にもかかわらず、長身の真弓の裸体は完璧な美しさを保っていた。盛り上がった乳房、引き締まった腹部、長い四肢。それらを柔らかな脂肪がバランスよく覆っていた。大柄の近

藤が真弓の両腕を掴み、多田と大内が両足を押さえ込んだ。

その時、照明の明かりが、真弓の全身を照らし出した。

「恵子。ご苦労だったね。お陰で最高の作品が出来たよ……。これから最後の仕上げにかかる。お前には気の毒だが死んでもらう。ただ殺すのはもったいないから調理して我々五人で食することにした。調理方法を説明したい。まずお前の魅力的な乳房を包丁で切り取り、そのフライパンで炒める。味付けは塩・胡椒だ。次にうつ伏せにして尻の肉を切り取る。こちらはステーキとしゃぶしゃぶにするつもりだ。味付けは何が好みだ？ポン酢かい？君がこの時点で生きていれば味

見させて上げるよ。次は両太股だ。こちらは刺身で頂
こうか。最後はあそこを切り取り軽く炙ってレモン汁
で頂くつもりだ。ここにいる皆は今日のために昨日か
ら食事を抜いているのさ。最高の昼食となる筈だ。三
上用意はいいか？」

一樹はVTRカメラを構え、一気に話した。三上が
大きめの肉切り包丁を右手に持ち、左手で真弓の右乳
房を掴み上げた。



「ははははは……」

真弓の突然の笑い声に一同は唾然とした表情になった。
つた。

「この女狂っちまったぜ。三上早く調理にかかれ」

「お遊びはこれまでよ。一週間けっこう楽しませてもらったけど、喜んで貴方達の胃袋に収まるほどM女じゃないのよ」

真弓は言い終わると、両腕を押さえつけている近藤の顔に向けて唾を吐きかけた。真弓は近藤が片手で顔を拭こうとしたそのスキを見逃さなかった。空いた方の右手の人差し指と中指を近藤の両目に突き刺した。
「ギャー！」という絶叫がわき上がった。

両手が自由になった真弓は腹筋のみの力で起きあ

がり、多田と大内の二人にも、近藤と同じように顔面攻撃を行った。一瞬後、三人の男達が顔を押しさえ、床を転がり回っていた。三上が肉切り包丁で斬りかかってきた。真弓は、その腕を取り込み、肉切り包丁を奪い一閃した。三上の首から鮮血が吹き出し天井を真つ赤に染め上げた。三上は首を押しえながら床に倒れ伏した。

真弓はゆっくりとした動作で調理用テーブルを降り、VTRカメラの後ろで震えている一樹に近づいた。

「こっちに来なよ。坊や。おねえさんが可愛がってあげるから」

「止める。止めてくれ人殺し。俺に近づくな！」

「どっちが人殺しなのさ。昨日の夜にあんた達が話し

ているのを聞いたよ。罪もない女を陵辱したあげくに、アキレス腱を切って山に捨てた話をね。そうやって五人殺したそうね。私が裁いてあげるわ。判決は死刑よ」

一樹は床に座ったまま後去った。すぐに壁に後ろを阻まれた。真弓が一樹に覆い被さるようにして、両肩に手をかけた。ゴキツという鈍い音がして、一樹の両肩が外された。絶叫が一樹の口からほとばしり出た。激痛が和らいだ頃に、真弓は一樹の股間に顔を入れ、柔らかくなった男根を口に含み舌で舐った。

すぐに反応し大きくなった男根を飲み込み激しく顔を上下させた。そして右手に持った肉切り包丁を男根の付け根に当て、一気に引いた。

「ギャー」という絶叫とともに切り口から血がほとば

しり出て真弓の顔を真っ赤に染めた。虫の息の一樹をそのままにして、まだ息のある近藤、多田そして大内の三人にも一樹と同様の処置を行った。

四人の男根を十分に熱したフライパンに載せた。

「ジュツ」という肉が焼ける香ばしい匂いがキッチンに広がった。十分に焼いた男根を箸でつまみ、床に転がっている持ち主の口にねじ込んでいった。

「自分の持ち物はどんな味がする？」

妖艶ともいえる笑みを浮かべた。真弓は包丁を片手に、まだ息のある者達の首を切り裂いた。事を終え、別荘の外に止めてあったバンの中から、自分の衣服を取り出し身につけた。下着は切り裂かれていたので、火をつけて燃やした。別荘に戻り、納戸にあった灯油

缶を取り出し、中身を床にばらまいた。

「ジ・エンドね」

玄關に立ち、火をつけたタバコを床に投げ捨てた。

灯油を十分に吸った絨毯に引火し、黄色い炎が、めら

めらと奥に向かって広がり始めた。真弓はバンに乗り

込み、別荘を後にした。

第三章 逆襲

一連の銀行強盗事件のために、霞ヶ関にある警視庁本部庁舎の十階に公安課特別対策室が設置された。室長に就任したのは、警視庁公安部外事一課所属の工藤真弓であった。真弓は、バカンスから戻ってすぐに警視総監に呼び出され、その足で首相官邸に連れて行かれた。首相以下の関係者は、ミニスカートから真弓の覗く太股に圧倒された。異例のことであるが、首相自ら真弓に特別対策室の件を伝えた。

真弓は首相官邸から戻るやいなや、スタッフの選定に取りかかった。対策室の具体的な運営方式はすべて一任されていた。スタッフの選定に併せ、対策室内のレイアウト作業にかかった。公安課から男子職員が派

遣され、事務机やソファークセット等の搬入や配置作業を行っていた。

真弓は、窓から覗く霞ヶ関界隈の景色をまんじりとも無く眺めていた。男子職員は、真弓の指示のもと嬉々として働いていた。何しろ警視庁きつての美女だ。張り切るのも無理は無い。公安課の大友課長が、陣中見舞いに訪れた。その時、真弓は自分の机について、パソコンを使い事務作業を行っていた。まわりでは男子職員が汗水流して清掃作業を行っていた。

「相変わらずだな」

真弓はキーボードを打つ手を休めた。

「あつ。大友さん……相変わらずって？」

「男は皆、真弓君の言いなりだ」

「……」

真弓は妖艶な笑みを浮かべた。

「おっと。俺まで誘惑しないでくれよ」

「誘惑なんて人聞きが悪いわ。美人の奥さんがいる男性には興味がないの」

「……ところで、スタッフは決まったのか？」

「主要メンバーは決まったわ。後藤瞳、白石美由紀、木下真理子の三名よ」

「ほう。猛者ぞろいだな。警視庁にアマゾネス軍団の誕生か」

「失礼ね。奥さんにこの間の宴会のことをバラスわよ」

大友は腰を浮かせた。

「それだけは勘弁してくれ。デカがカミサンに殺されるのは前代未聞のことだ」

「冗談よ」

ふたりは、真弓の帰国祝いを渋谷の居酒屋で行ったときのことを思い出していた。大友は酔った勢いで真弓に抱き付いたのだ。真弓は大友が嫌いなタイプではなかったので好きなようにさせていた。翌日、公安課職員の大友に対する視線が厳しかったことは言うまでもない。

翌日の午前九時には特別対策室に全スタッフ四名が勢揃いした。男気は無く、室内はぱっと可憐な花が

咲いたような明るい雰囲気となっていた。

最年少の後藤瞳は、本庁で麻薬や銃器関係の調査業務を行っていた。スレンダーな姿態ではあるが胸や尻は十分に大きく、顔立ちも目鼻立ちがくつきりとした美人だった。格闘術や射撃の腕は大したこと無いが、数か国語の外国語が話せた。

白石美由紀は警視庁航空隊に所属しておりヘリの操縦については、警視庁内で並ぶものがいなかった。また、射撃の腕前は一級であり、警視庁の射撃大会では真弓と常に上位を争っていた。ボーイッシュな感じの美人であり、男子職員ばかりでなく同性からの人気も高かった。

最後に木下真理子であるが、コンピュータ技術に詳

しく、警視庁の科学調査課に所属していた。格闘術が得意であり、真弓と互角の勝負ができる警視庁唯一の女性だった。三人の中では最もグラマーであり、真弓といふ勝負だ。身長も百七十センチくらいはあり、容姿も端麗で申し分のない美人であった。

「九時半から隣の会議室でミーティングを開きます。皆遅れないようにね」

真弓が立ち上がり皆に告げた。

「初仕事ってわけね」

瞳がおどけた声を出した。

「張り切り過ぎないのよ」

美由紀が諭すような口調で、隣の席に座っている恵の頬を指先でついた。

九時半には、皆、会議室に集合していた。

「時間になったのでミーティングを始めます。今回の一連の銀行強奪事件は、これまでにない凶悪なものです。この二週間で都内にある三カ所の銀行が襲撃され、数十億の現金と数百名の死傷者さらには五名の人質を奪われました」

そこで、真弓は一呼吸を置いた。

「皆分かっていると思うけど、私達の使命は一連の銀行強盗事件の犯人を殲滅することよ」

「殲滅？」

「そう。逮捕ではないわ。殲滅するのよ。重武装した

彼らが無傷で逮捕することは初めから考えていない
わ」

「これだけのメンバーで？」

真弓はそれには答えず、会議室の隅に置いてあった
トランクケースを両手で持ち上げ、「えいっ」という
掛け声で会議机の上に置いた。

「パチン」という音がして、蓋が開けられた。中には
四十ミリグラネードランチャーを発射するM二三〇
付きの自動小銃M一六Aニが二丁に、アメリカ海兵隊
が使用している狙撃銃M四〇A一が一丁と弾薬類が
入っていた。M四〇A一の銃床はグラスファイバー製
で、銃身はステンレススチール製、スコープもユナイ
テル社製の十倍のものを使用しており、現在では狙撃

銃として最高性能を誇っている。四百五十から六百三十メートルの距離で最も効果的な射撃が可能であった。美由紀が早速、M一六Aニを手にし慣れた手つきでコッキングハンドルを引いた。

「これならやれそうね」

「移動手段は警視庁航空隊のヘリを使うわ。ヘリは屋上のヘリポートよ」

ヘリの名称はユーロ・コプターSA三六五N、最大巡航速度二四〇キロメートル毎時、航続距離九百十九キロメートルでイルカを思わせる美しいフォルムを持つていた。

「真弓、そろそろいいかしら？」

真理子が立ち上がり、部屋の証明のスイッチを消し、

会議机の上に置かれたノートパソコンに接続した液晶プロジェクタのスイッチを押した。天井から吊り下げられたスクリーンには、防犯カメラのものと思われる白黒の画像が映し出された。銀行強盗犯のメンバーがはっきりと映し出されていた。犯人の中に、身長が百八十五センチくらいで肩幅が広くがっちりとした体格の男が映った。白髪まじりの角刈りで、年齢は四十代後半から五十代前半にというところだろうか。

「こいつが主犯格ね」

真弓が腕を組み、スライドに映し出された男の顔をじっと見つめていた。

「そうらしいわ。犯罪者履歴データベースに、この男は存在していないことを確認したわ」

真理子が答えた。

「他のメンバーはどうなの？」

「皆、犯罪暦はないようね」

真理子が首を横に振り、真弓の質問に答えた。

「この大男がかまえているのはM二四九ミニミ機関銃ね。肩に描けているのはMGL四十ミリグラネードランチャーよ」

「こんな奴等が相手じゃ南部式しか持っていない警察はお手上げね」

次に映し出されたのは、女子行員が射殺されるシーンだった。全裸にされた女子行員が女兵士に陵辱され、拳銃でアヌスを射抜かれるものだった。瞳以外は平然とした表情でスクリーンを見つめていた。

「こいつら獣以下よ。拉致された人質は絶望的ね」

美由紀のハスキーな声が室内に響き渡った。

「そうね。それにこいつらプロの殺し屋よ。表情ひとつ変えていないわ」

スライドは、全裸にされた人質の女性が、首謀格と思われる男によって連れ去られるシーンで終わっていた。

「以上よ。さっきも少し触れたけど。奴らには犯罪履歴も自衛隊に所属したという記録もないの。でも武器の扱いはまさにプロ級と言えるわ」

真弓は立ち上がり、液晶プロジェクタの電源スイッチを落とした。

「じゃ。アメリカ軍とか、外国の軍隊の出身者では？」

「瞳。なかなか鋭いじゃない。アメリカ軍には照会済みよ。でも該当者はいなかったわ」

「フランスの外人部隊という線はどうかしら」

瞳はさらに食い下がった。

「私もその線が怪しいという気がするわ……。そこでね。瞳にお願いがあるの」

「何？真弓姉貴のことなら何でも聞いちゃうわよ」

「フランスに行つて、外人部隊の事を調査して欲しいの」

「……いつ？」

「出発は明日。旅券も手配済みよ」

瞳は目を大きく見開いた。

「急な事は重々承知よ。でも事は一刻を争うの」

「わかったわ」

次に真弓は、真理子の方を向いた。

「あいつらのアジトの情報を何か掴んだ？」

「駄目よ。襲撃の度に尾行車をつけるのだけれど、皆、失敗しているわ。尾行車がライフルで狙撃され、何人も負傷しているの」

「彼奴ら、何人もの後方支援部隊がいるのね。まるで軍隊そのものだわ」

会議はその後、半日ほど続いた。

会議を行った翌日の正午、特別対策室に一本の電話が入った。

「真弓、現れたわ。今度は渋谷よ」

真弓は返事もせず、猛然と廊下に走り出て、階段をかけた。ミニスカートが捲りあがり、魅力的な太股が露になるのもお構いなしだった。美由紀が息を弾ませて後に続いた。

真弓は屋上のへりの後部席に乗り込み、真っ赤なシヤツと黒のミニスカートを無造作に脱いだ。赤のブラジャーとパンティだけの姿になり、急いで迷彩服と防弾チョッキを身につけた。その間に、美由紀はへりの操縦席に座り、エンジンを始動し上昇させた。

「ここからだ、渋谷まで五分というところね」
へりに乗ってからの真弓の第一声だった。

「飛ばすわよ」

「OK」

真弓の予告どおりきっかり五分後に渋谷上空に到着した。眼下の国道に多数のパトカーが停車していた。パトカーの向きで犯行現場の位置がすぐにわかった。

真弓は命綱の先端についたフックをベルトにかけ、自動小銃のM一六A二の銃床を右手でつかみ、スライド式のドアを開け放った。突風が真弓の黒髪を巻き上げた。

「行くわよ」

ヘリの下方二百メートルの地点に、目指す黒塗りのバンがとまっていた。ヘリは鼻先を下げ、急降下の体勢に入った。黒塗りのバンのサンルーフが開けられ、自動小銃M一六A二を手にした兵士が顔を覗かせ、へ

リに向かって発砲し始めた。何発か機体に被弾したが、大事にはいたらなかった。真弓も上体を乗り出し、五・五六ミリ弾を応射した。先ほどの射手に命中した。サ・ンルーフが間髪を入れずに閉められた。黒塗りのバンは装甲を施しているらしく、着弾は、すべてはねかえされた。

へりはぐんぐん、高度を下げていった。バンの後部席のドアが開けられ、中から迷彩服を着た男が対空ミサイルSAMを小脇に抱えて現れた。

「美由紀。ミサイルよ。進路を変えて！」

へりが曲芸のように上空で反転し、ビルとビルの間隙に滑り込んだ。対空ミサイルはへりではなく、高層ビルの側面に突き刺さった。「ドーン」という爆音が

して爆風とともに何万という強化ガラスの破片が飛び散り、車道に雨のように降り注いだ。幸いにして、ビルの住人はすべて待避していたので負傷者はひとりも出なかった。ヘリは高層ビルの陰で滞空していた。「美由紀、五十キロの速度で、隣のビルの陰に移ってちょうだい」

真弓は、自動小銃M一六A二をかまえた。ヘリはゆっくりと動き出し速度を上げた。真弓の位置から斜め下方に、黒塗りのバンと、そのすぐ近くに二人の男が見えた。一人は対空ミサイルをかまえ、もう一人がM二四九ミニミ機関銃をヘリに向かって発砲してきた。

真弓は対空ミサイルの射手に一瞬で狙いをつけ、引き金を引いた。対空ミサイルがヘリから数メートルの

距離を横切っていった。Mニ四九ミニミ機関銃から放たれた銃弾が、ヘリの機関部に命中した。ヘリは白煙を上げながら、黒塗りのバンからは死角となる位置に緊急着陸した。

「援護して！」

真弓は、M一六A二を美由紀に渡し、狙撃銃M四〇A一を手にし、ヘリから飛び降りた。車両等の遮蔽物を利用して、黒塗りのバンに近づいて行った。バンから二百メートルの地点まで移動し様子を窺った。黒塗りのバンの近くには、先ほどの対空ミサイルの射手が、頭部から血を流し倒れていた。Mニ四九ミニミ機関銃を構えた大男が、仁王立ちになって辺りを睥睨（へいげい）していた。

真弓はその男の頭部に、M四〇A一狙撃銃の狙いを
つけ、静かに引き金を引いた。七・六ニミリNATO
弾の鋭い衝撃が肩に伝わった。男の額に着弾し血しぶ
きをあげた。男はゆっくりと前のめりに倒れた。

襲撃された銀行内では、襲撃者達に動揺が走ってい
た。

「アルが殺られたぜ。他の二人も即死だ」

「敵は何人だ？」

「一人だよ。これを見てくれ」

襲撃者達は、メガネを掛けた痩せ形の男の周りに集
まった。男が操作していたノートパソコンは、黒塗りの
のバンに取り付けられた高性能望遠カメラに無線で
繋がっていた。ノートパソコンの液晶ディスプレイに

は、迷彩服に身を包んだ真弓の姿がはっきりと映し出されていった。

「ヒュー。日本の警察にもこんないかした女デカがいたのか」

「あたいが、この牝豚のオマ*コを抉りだしてやる」

女戦士が自動小銃M一六A二を構え、出口に向かった。首謀格と思われるがっちりとした体格をした男が女を止めた。

「止める。今日はこれで引き上げるんだ」

「どうして。あんな女あたいの敵じゃないよ」

「わかっている。お前はあの女を殺りたいんじゃない、犯したいのだろうか？ 楽しみは最後まで取っておいた

方が何倍も楽しめる」

男がウインクして見せた。そして無線機に向かって早口で話した。エンジン音がして、黒塗りのバンが銀行のガラスドアをバックで突き破ってきた。男達は強奪した現金と、全裸にした人質の女一人をバンに載せ、素早く乗り込んだ。

黒塗りのバンは、銀行を離れてすぐに狭い小路に入った。交通量の多い通りは避け、何本もの小路を抜けていった。三十分ほど走った後に大型の貨物トラックの後ろに停車した。そこはビルの合間の小路で、交通量もほとんどなかった。トラックの後部扉が音もなく開き、路上に鉄製の板の他端が落とされた。

バンはその板をのぼりトラックの中に消えた。襲撃

者達は、首謀格の一部の人間を残し、トラック荷台の前方に設けられた居住区間に移動した。

「マイケル。あの女の素性を調べてくれ」

「わかったよ。少佐。二、三日かかると思う」

トラックの荷台に収まったバンの中では、襲撃団の首領と思しき人物と、銀行でノートパソコンを操作していた痩せ形の男が会話していた。その男はノートパソコンが入ったスーツケースを片手にバンから降りた。ドアを閉めようとしたその時、女の啜り泣きが聞こえた。

「止めて……。お願い。そんなことしないで……。」

「止めてだつて。ここはこんなに濡れてるじゃないか。そうかい。そんなにいいのかい？お姉さんがもつとよ

くしてあげるよ。ほらいい娘だからもつとまたを広げ
な」

「嫌よ。止めて……。ああ……。」

「……美味しいよ。こんなに濡れて。ぐちよぐちよだ
よ。お前のオマ＊コはあたいのものだ」

後部席を見るとアリサが、全裸で後ろ手に縛られた
人質の女の股座に顔を入れているのが見えた。人質の
女は、執拗な愛撫のためか、俗に言う、逝っている状
態であり、視点が宙をさまい、口を半開きにして喘い
でいた。男は苦笑いを浮かべドアを閉めた。

第四章 悪魔の宴

そこは、トチノキやコナラ等の深い広葉樹林の森に囲まれた老人ホームの一角に位置していた。その土地の一边を通る一本の国道のみが、外界と老人ホームを繋ぐ唯一の道だった。老人ホームの建屋は、建坪が五百坪程で、総二階の鉄筋コンクリート建てだった。そこからさらに奥まった一角に、深い木立に隠れるようにして、建坪三百坪程の平屋の鉄筋コンクリート住宅が立っていた。

その正面には、砂利を敷き詰めた駐車場があり、一台の大型トラックが止まっていた。

玄関の扉を開くと、正面にニメートル四方程のガラスドアがあり、そこから先は百坪程の中庭になってい

た。西洋風の中庭には中央にプールが、満々と青い水を湛えていた。その建物の一室では、今まさに悪魔の宴が始まろうとしていた。

五十帖ほどの広さの部屋で中央に、縦一米ートル横二メートルの大きさの調理用テーブルが置かれていた。また、その近くには縦一・五メートル、横一米ートル、高さ〇・五メートルのコンロが置かれていた。上には金網が敷かれ、中には真つ赤に燃えた炭がいっぱい詰まっていた。コンロの両端には床から直径五センチほどの鉄製の杭が立てられており、杭の上部は二股になっていた。それらの周りを取り囲むように椅子やテーブルが置かれ、少佐や他のメンバー達がワイン等のドリンク類を飲みながら歓談していた。

両開きのドアが開けられ、料理長の陳が現れ、一行に軽く挨拶した。続いて、助手二人がキャスター付きのテーブルを押ししてきた。その上には素っ裸で目隠しと耳あてをされた紀子がうつ伏せに寝かされていた。

紀子は、銀行強盗団によって拉致された人質であった。年齢二十一歳、大学四年生で法学を専攻していた。清楚で整った容貌を持ち、グラマーな肢体を持っていた。女優としても十分通用するだろう。

「紳士・淑女の皆様、本日もお忙しい中、恒例の晩餐会にご参加くださいました有り難うございます。本日の食材は、ここに用意いたしました牝豚でございます。牝豚にはアルコールと少量のモルヒネを与えておりますので長い間、苦痛に堪え、皆様のお楽しみに添え

るものと期待しております。さて、本日は、牝豚を串刺しにし、たっぷり時間をかけてコーストするつもりです。お手元にご用意した用紙にご希望の部位、例えばオマ＊コ等と記入して下さい。希望者の多い部位については後ほど抽選にて決めさせていただきます」

観客席に歓声のどよめきの声が上がった。料理長の陳が二人の助手に目配せした。助手の一人が紀子を抱き上げ、調理用テーブルに載せ、目隠しと耳あてを外した。紀子は調理用テーブルに両手をついて辺りを見回した。アルコールとモルヒネのせいか、目は虚ろで、頬にほんのりと赤みがさしていた。助手の二人が左右から、手足を掴み四つん這いの格好をとらせた。調度、股間が観客席によく見える角度になっていた。観客席

からは、股の間に豊かな両乳房がつり下がっている様子が見えた。股間にある筈の陰毛は、薬液によりすべて脱毛されていた。頭髪以外もすべて同じ処理をされていた。

陳は、四つん這いになった紀子のサーモンピンクのアヌスにオリーブオイルを塗った人差し指を出し入れした。紀子は屈辱と快感が入り交じった複雑な表情を浮かべた。そこへ見物人のアリサが近づき、紀子の唇に吸い付き、口の中を舌でかき回した。他の見物人が歓声をあげた。オリーブオイルで滑りが良くなったところで直径三センチのホースを十センチ位差し込み、吸引機のスイッチを入れた。「キューーン」という機械音がして、排泄物を吸い出すゴボゴボという音

がした。これで宿便もきれいさっぱり無くなった筈だ。ホースを抜き取り、アヌスにシャワーを吹き付け洗浄した。

その間、二人の助手が紀子の身体中にオリーブオイルを塗りたくっていった。オイルまみれの手が股間に触れる度に、紀子の口から喘ぎ声が洩れた。アリサが、また席を離れ、調理用テーブルに近づいた。観客達の顔をさっと見渡し、一気に黒いドレスを脱ぎ去った。下着は何も付けておらず、日本人離れをした豊かな肢体が現れた。重たげな乳房と盛り上がった尻を持っていた。

「ヒューヒュー」

観客達にどよめきの声が上がった。得意げな顔で、

調理用テーブルに上がり紀子を抱きしめるような格好で横になった。嫌々をする紀子の唇を強引に奪い、舌を入れてかき回した。紀子の舌は甘く蕩けるような味がした。

さらに、豊かに盛り上がった釣り鐘上の乳房を舌で十分に愛撫した後に、紀子の太股を大きく広げ、股間に顔を入れた。舌で包皮を捲り小粒なクリトリスを舐めた。オリーブオイルと愛液で濡れた臍に、舌を入れてかき回した。それらを交互に繰り返した。

数分の後、紀子が腰を持ち上げ逆海老剃りのかっこになり、絶頂を迎えた。ぐったりとした紀子を四つん這いにさせ、二人の助手に両手両足を押さえさせた。

それを合図に陳が調理テーブルの下から長さ二・五メ

一トルほどの鉄製の串を取り出した。その一端には鋭い穂先が取り付けられていた。アリスは調理用テーブルの横に立ち上がり、鉄串を受け取った。

アリサは満面の笑みを浮かべながら、紀子のアヌス

「さて、皆様、これからショーの始まりです」



にその穂先を十五センチほど一気に突き刺した。紀子の身体がビクンと揺れた。紀子は首を大きく後ろ向きに曲げ、激痛の原因を探ろうとした。自分のアヌスから突き出している鉄串を見て、目を大きく見開き、口を大きく開けた。絶叫が飛び出し、身体を激しく上下左右に動かしした。両手両足は、屈強な男達により拘束されていたので、逃げることはできなかった。

「止めて！人殺し……。痛い！痛い……」

「静かにしろ、牝豚。お前はこれから調理されお客様に食されるんだ」

アリサは、さらに鉄串を掴む手に力を入れた。鉄串は、一気に五十センチほど突き刺さり、紀子は白目を開けて失神した。鉄串を飲み込んだアヌスから少量出

血した。そして、股間から失禁による尿がほとぼしり
出た。陳がシャワーでそれらを洗い流した。アリサは
さらに鉄串をアヌスに押し込んだ。紀子の肩口から穂
先が飛び出した。その先が五十センチほど出たところ
でアリサは鉄串を手放した。

「内臓は避けて、鉄串を刺し込んであります。すぐに
は死にませんのでご安心下さい」

アリサが陳の口調を真似た。そして客席から赤ワイ
ンのボトル持ってきて、腹這いになり鉄串を打たれた
紀子に近づいた。赤ワインを紀子の顔面に注ぎかけた。

「そろそろ起きなよ」

紀子は失神から醒め、自由になった右手を尻の方に
持っていった。自身のアヌスから突き出ている鉄串を

掴んだ。そして天井を見上げ、口を大きく開き絶叫した。二人の助手が泣きじゃくる紀子を後ろ手に縛り、太股をくの字方にし、両足首を鉄串に紐で固定した。膾までよく火が通るようにとの配慮だった。

鉄串の両端を持ち、コンロの近くに運んだ。鉄串の両端を、床から突きでた二本の鉄柱の二股部分にかけた。頭部以外の部分が、直接コンロの火に炙られるように調整した。その時点で紀子の身体とコンロの鉄網の間隔は一メートルぐらいだった。

「この二本の鉄柱は、ご存じのように上下動が可能です。このスイッチで高さを調節します。まず、三十分ほど、この位置で炙ります。その間に調味料で味を整えます。それから三十分はさらに五十センチ下げて炙

ります。焼き上がりましたら、調理用テーブルに戻し解体します。ご希望の肉を切り取りますので、お召し上がり下さい」

コンロの上に串刺しにされた紀子の身体を、助手がゆっくりと回転させ始めた。紀子は既に悲鳴をあげるのは止めていた。弱々しい声で助けを求めている。コンロから放射される輻射熱によって紀子の全身は赤く照らし出されていた。今はまだ表面を焼いているに過ぎないが、そのうち骨髓までちようどよい具合に火がとおる筈だ。観客達は、歓談を中止し、残酷で扇情的なショーに魅入っていた。

炙りはじめて二十分位後に、陳が塩や胡椒等の調味料を紀子の全身に振りかけ始めた。股間には特に入念

に調味料を手ですりつけた。指で膾内にもすりつけているようだった。紀子はまだ話すことはできるようで、しきりに陳に対し悪態をついていた。豊かな両乳房の先端から溶けた脂が滴り落ちていた。陳が小振りの肉切り包丁で右乳首を切り取った。それを小皿に入れた助手に手渡した。助手はそれを少佐のいるテーブルに置いた。少佐はそれを箸でつまみ上げ、口に放り込み、咀嚼し飲み込んだ。

「美味だ」

三十分が経過し、鉄串の高さはコンロの金網の表面から五十センチのところ固定された。腹の部分が大きく膨れ上がってきていた。陳は小振りの肉切り包丁の先端で、腹の膨らみを突いた。ガスが洩れたのか、

元の状態に戻った。紀子にはまだ息があった。しきりに意味不明なことを口走っていた。

丁度一時間後、紀子は串刺し鉄串を刺されたまま、調理用テーブルの上に運ばれた。顔以外は綺麗な狐色に焼き上がっていた。陳はアヌスの方から鉄串を一気に抜いた。紀子の意識は混濁しているようだが、まだ息はあった。

陳は大振りの中華包丁を取り出し、乳首の無い右乳房を掴み上げ、切断した。次に左乳房も同様にした。助手がそれらを大皿に盛り上げていく。陳は、細身のナイフを取り出し下腹部に突き立て、股間へと滑らせ、アヌス近くまで切りすすめていく。次に刃を返し、下腹部まで折り返した。握り拳大の性器部分が切り取ら

れた。それをまな板に載せ、大陰唇をめくりあげると湯気が立ち上がり、鮮やかなピンク色をした臍口が見えた。

「湯気が出ているぜ」

「汁気も多そうだ」

観客はいつの間にか席を離れ、陳の包丁裁きが間近に見られるように周りに集まってきた。性器部分は、希望者が多すぎて抽選にするにはどうかという意見が出ていた。それで陳の判断で皆に分配することに。その程度の裁量権は与えられていた。まず、クリトリスから刃を入れて、二つに切り分けた。そしてそれを一口大に切り分けていった。皿に盛ると、観客達はそれに群がるように手を出して、あっという間に

無くなってしまった。

「旨い。歯ごたえも抜群だ。しこしこしてアワビより
いけるぜ」

「アリサのおマ*コと、いい勝負だな」

クリスがアリサをからかうように言った。

「今度はあんたのおチン*ンを調理してやるよ」

アリサがクリスの股間を鷲掴みにした。陳は次に、
紀子をうつ伏せにさせ、湯気を立て、十分に脂がのつ
た尻肉を切り取った。アヌス部分は細身のナイフで器
用に切り取った。切り取られた尻肉も刻まれ男達の口
に放り込まれた。女から見ても魅力的に見える太股の
肉もブロック大に切り分けられ、さらに一口大に刻ま
れ大皿に盛られた。両手足が切断され、胴体と首だけ

になった。

陳は、慎重に、仰向けにした胴体の腹部を細身のナイフで切り裂いていった。カラフルな色をした臓器が現れた。陳はそれらを両手で掴み、大鍋に入れた。心臓と肝臓だけは、大皿に盛りつけた。最後に首を切断し、それを大皿に立てかけた。

「皆様、今晚のメインディッシュの味はいかがでしょうか？さて今宵はこの食用豚の他に、牝豚を二頭用意しております。存分にお楽しみ下さい」

両開きのドアが開き、素っ裸で鉄串に両手両足を縛られた涼子と美穂が運ばれてきた。二人はそれぞれ客席のテーブルの上に運ばれ、手足の拘束を解かれた。

涼子が紀子の生首に気づき、口を大きく開き、叫び声

をあげ始めた。美穂も気づいたのか、白目を剥いて失神した。アリサが立ち上がり、涼子の頬を殴りつけた。

「静かにおしよ。この牝豚が。お前もこうなるんだ」

アリサはフォークに刺した肉汁が滴る紀子の尻肉を旨そうに頬張った。そして助手に命じ、涼子を仰向けに寝かせ、両足を上げさせ、太股を押し開かせた。

サーモンピンクの膣がパツクリと口を開けた。

「少佐。ワカメ酒ってのは、こう飲むんだよ」

隣の少佐にウインクし、膣口にワインのボトルの口をあて、中身を注ぎ込んだ。口をつけ、音を立てながら吸い始めた。いつの間にかクリスが、涼子の豊かな乳房を揉みながら、男根を口に啣えさせていた。男根を喉の奥まで突き入れるので、苦しきのあまり、目に

いっぱい涙をため、下半身を微かに震わせていた。アリサは一本目のボトルを空け、二本目を涼子の瞳に注いでいた。

調理用テーブルでは、陳とその助手達が、失神した美穂を仰向けの姿勢で寝かせ、細身のナイフで腹部に縦の切り込みを入れていた。血が噴水のように吹き出していた。美穂は激痛のためか、一度失神から醒めたが腹を裂かれている状況を目撃し、白目を剥いて再度失神した。腹部を割き、内臓をすべて取り出した。その瞬間、四肢が激しく痙攣し、すぐに動かなくなった。瞳は閉じられたままだ。内臓の代わりに、米や野菜等を詰め糸で縫合した。そして黄身を混ぜた岩塩を、顔を除く全身に厚く塗り始めた。次に、アルミホイルを

巻き付けていった。顔は露出していたが、他は繭のようにアルイホイルが巻かれた。部屋の壁際に設置された巨大なオーブンの扉を開け、美穂を中に入れた。オーブンの側壁には、頭部が通る穴が開いており、美穂の顔はその穴を通し、オーブンの外側に出された。陳によつてオーブンのスイッチが入れられた。数分後、肉を焼く香ばしい匂いが漂い始めた。

テーブル席では、アリサとクリスによる涼子への陵辱が続けられていた。涼子は恐怖によるものか泣きはらした顔は虚ろで、二人の意のままにされていた。アリサがうつ伏せにした涼子のアヌスと膣に葡萄等のフルーツを、片端から突っ込んでいた。一方、クリスはワインをボトルごと涼子に飲ませていた。

「こいつを、このまま焼いたら、さぞフルーティな味がするだろうね」

第五章 誘拐

真弓達三人のメンバーは深夜近くまで、六本木のスナックで飲んでいた。終電が近づいたのでお開きにすることにした。三人はスナックが入っているビルの前で別れた。真弓は酔い冷ましに少し六本木の通りを歩くことにした。酔った中年男やチンピラが、傍らを通り過ぎる度に声をかけてきた。ミニスカートから伸びた長い足をじっと見つめるのは皆同じだった。十分ほど、夜の街を散策した時、尾行に気づいた。尾行は一人だった。真弓の二十メートル後方につけていた。真弓が急ぎ足になれば尾行もそれに合わせ影のように放れなかった。自動拳銃ベレッタ九二がに入ったバツクを掴む手に自然と力が入った。すぐ近くにクラブK

のネオンサインが目についた。扉を開け、中に入った。店内では十代の男女がパラパラを踊っていた。入り口から死角となる位置で、様子を窺った。すぐに、ダークスーツに身を包み、がっちりとした体格の初老の男が現れた。彼奴だった。銀行の防犯カメラで捕らえた白髪混じりの短髪に四角い顔、眼光が異様に鋭い感じの男だ。男が、真弓が潜んでいる方を見てにっこりと微笑んだ。

奴は悪魔か。真弓は寒気を感じた。男がゆっくりと真弓のいる方に近づいてくる。何人かの男女とすれ違い様にぶつかっていた。

「いてえよ！」

派手なシャツを身につけ長髪のチンピラが大げさ

な声を上げた。

「やい。爺。どこに目つけているんだ」

男はチンピラを冷たい目で上から見下ろし、右手で襟首を掴んだ。ゆつくりと腕を上を上げていった。チンピラの足が床から放れ、爪先が空を切っていた。チンピラは痩せ形であるが、六十キロは優にあった。それを片手で持ち上げるとは通常の腕力の持ち主ではない。男はぼろ切れのようにチンピラを投げ捨てた。チンピラは床に腹這いになりゼイゼイと苦しそうに息を吐いていた。男は何事も無かったように、真弓の方を目指して歩き始めた。一部始終を目撃した客達は素早く道を開けた。真弓はここで決着をつけるべきかどうか躊躇していた。場内には少なく見積もっても二

百人以上の人間がいた。ここで撃ち合っては大勢の犠牲者が出る筈だ。そんなことを考えているうちに男は、すぐ目の前まで迫っていた。真弓の前に止まり丁重な挨拶をした。

「素敵なお嬢さん。一曲踊っていただけませんか？」
真弓が返事をする前に、腰を抱かれた。逞しい身体だった。筋肉のかたまりに抱かれているようだった。

男は今風のステップを踏みはじめた。男の身長は百八十五センチ位だろうか。強い力で抱きしめられた。真弓の爪先は軽く床に着いているだけで男の圧倒的な力によって踊らされていた。男の右手が真弓の豊かな尻を掴んだ。ゆっくりと下に下がりミニスカートの奥に滑り込んだ。

「止めて……」男の口が真弓の口に重なり、強引に舌を入れてきた。

男は真弓の唾液を旨そうに啜りだしていた。男の太い人差し指がアヌスにくい込み、中をかき回した。真弓のパンティは、いつの間にか愛液で濡れ始めていた。真弓は両手を大きく突きだし男から放れた。下を向き、「はあはあ」と肩で息をした。顔を上げるとそこに男はいなかった。

周囲を見回した。男が客の若い女と連れ添い、非常口と書かれたドアをくぐって消えた。真弓はハンドバッグに右手を入れ、自動拳銃ベレッタ九二Fの安全装置を外しながら、後に続いた。階段を上るハイヒールの靴音が響いていた。

「キヤー！」

女の悲鳴が突然聞こえてきた。真弓は自動拳銃ベレツタ九二Fを右手にかまえ階段を一気に駆け上がった。踊り場に若い女が、仰向きに倒れていた。切れかけた裸電球が、女の身体を暗がりの中から浮き上がらしていた。女は既に絶命していた。洋服の前は裂かれ、白い乳房や性器が剥き出しにされていた。性器からはバタフライナイフの柄が飛び出していた。首に絞められた痕が残っていた。頸椎が砕かれているようだ。ほとんど即死状態だった。突然、真弓は鳩尾に強烈な衝撃を感じ、すぐに意識が遠くなった。

下腹部の異様な感じに気が付いた。目を開けると、六本木の夜景が飛び込んできた。遠くの方で小さな何

かが動いていた。目を凝らした。急に吐き気を催した。それらは、走行中の車両だった。すぐにすべてが明らかになった。真弓は自分が全裸で、屋上の縁に逆さまに吊り下げられていることを。

真弓は、これまでの人生で感じたことのない恐怖と

った膣やアヌスを舌で舐っていることを。

さらにその男が真弓の露にな

さらに襲撃者が後ろから真弓の腹部に手を回し、身



戦きを覚えた。全身に鳥肌が立った。男がちよつと力を抜けば、真つ逆さまに落下し地上に叩き付けられる運命だった。男の舌が褻を這い回り、クリトリスに吸い付き、強く吸引した。ぴちゃぴちゃという厭らしい響きと男が上げる荒い息が交差していた。急に痺れるような快感が襲ってきた。男の頭を太股で締め付け、両手で顔を覆い、鋭い喘ぎ声をあげた。髪を振り乱し、大きく仰け反った。真弓はその状態で二度、絶頂に導かれた。

「満足したか？」

気が付くと、屋上の床に仰向けに寝かされていた。太股の合間から男の顔が見えた。男は真弓の太股を鷲掴みにし、大きく開いた。男の物は驚くほど大きかつ

た。子宮深くまで貫かれた。気が付くと真弓は男の背中に手を回し、爪を立てていた。男の舌が、真弓の口内をかき回した。真弓の舌を吸い出し、音を立ててしやぶった。男は舌の感触に満足すると、重たげな乳房を口に含みながら、時に緩慢に時に激しく腰を叩き付けた。真弓は息も絶え絶えに号泣を放っていた。真弓は四肢を突っ張り三度目の絶頂を迎えた。男はぐったりとした真弓を四つん這いにさせ、サーモンピンクのアヌスに舌を深く突っ込んだ。

「あー。おー。いい……。もっと舐めて！」

十分に潤みきったアヌスに禍々しい感じのする男根を挿入した。「ずぶり」という音がして直腸深くまで貫かれた。男は真弓の重たげな白い乳房を驚掴みに

して、こねくり回した。痺れるような快感が、真弓の脳天を貫いた。

「もう駄目。凄い……あ……。駄目……行っちゃう。行く……」

男は腰を激しく使いながら、真弓のうなじを軽く噛んだ。真弓は逆海老剃りになり四肢を突っ張った。がくんという感じで床に突っ伏した。はあはあと肩で息をしていた。男が離れるのを感じたが、腰が痺れて動かなかった。両手を後ろに回され、「ガチャリ」という音が聞こえた。男は真弓の手錠を使って、真弓を拘束した。真弓を仰向けにした。大きな手で真弓の乳房や性器を撫でた。

「お前は、これまでに最高の女だ」

男の声が少し上擦っているように聞こえた。男は膝のベルトから、大振りの狩猟用ナイフを抜いた。

「ここで殺すのは、忍びないが、お前を生きたまま連れて返る自信はないんでね。今晚は一人で食事だ。お前を生きたまま喰らってやろう」

男の欲情に濡れた視線が真弓の乳房や性器に注がれた。真弓は金縛りにあつたように動くことができなかった。まるでネコに睨まれたネズミのようだった。男によって加えられた陵辱の余韻が全身に残っていた。

男が、仰向けになっても、豊かに盛り上がった乳房を左手で掴み、根本にナイフを当てた。その時、暗闇に銃声が響きわたった。男の身体が揺れ、真弓から離

れ驚くような早さで屋上を疾走した。隣のビルの屋上
に向かってムササビのように跳躍した。男を追うよう
にして、銃声が連続的に鳴り響いた。

「どうやら逃げられたようね。怪我はない？」

美由紀が、真弓の裸の肩を抱いた。

「大丈夫だと思うわ。手錠を外して」

「ちよつと待って」

美由紀は黒光りするグロック三十を、ベルトにはさ
み辺りを窺った。

「有ったわ」

真弓のハンドバックを拾い、中から手錠の鍵を取り
出した。陵辱のためか全裸でぐったりと横になってい
る真弓の背後に近づいた。女が見てもはっとするよう

な白く盛り上がった尻の合間から、精液が滴り落ちるのが見えた。自然に手が尻の合間に吸い込まれた。

「可哀想な真弓」

真弓は肩越しに美由紀の顔を見つめた。美由紀は真弓の裸体に気が動転していた。真弓の顔を両手でさせえ唇に吸い付いた。真弓の唾液が蜜のように甘く感じられた。真弓を仰向けに寝かせ、太股を広げ、顔を埋めた。包皮をめくりあげクリトリスを舌で舐った。真弓のむっちりとした太股が美由紀の頭を強く締め付けた。男によって犯されたアヌスに深々と指を差し込み、中をかき回した。

真弓は、一層美由紀の頭を強く締め付け、そして「ガクン」と仰け反り絶頂に達していった。ぐったりとし

た真弓をうつ伏せにした。真つ白い尻の膨らみが目に飛び込んできた。自然に手を当てていた。陶磁器のようになすべすべとした感触だった。

「食べてしまいたいくらい好きよ」

美由紀は上擦った声を上げながら、尻の割れ目に顔を埋めた。

翌朝、真弓は美由紀のベッドで目が覚めた。美由紀が全裸で隣に眠っていた。あれから、美由紀の自宅に連れていかれ、介抱を受けた。襲撃者との格闘によって、全身に軽い打撲を負っていた。それからベッドに入り美由紀に抱かれて眠りについたことを思い出し、目を瞑ると脳裏には昨日の陵辱シーンがはっ

きりと浮かんだ。不思議と屈辱感を感じなかった。ピルの屋上で逆さ吊りにされ、膣を舐めあげられたことを思い出した。ざらついた舌の感触が未だに鮮明に残っている。真弓の手は自然と自らの股間をまさぐっていた。

いきなりその手を掴まれた。目を開けると美由紀が、じつと真弓の顔を見つめていた。

「お早う。まだ物足りないの？」

「……」

美由紀はにっこり笑って、蒲団に潜り込んだ。太股を掴まれ、膣に暖かい舌が差し込まれた。

真理子は地下鉄に乗ろうとした時に尾行に気がつ

いた。皆と別れた時から同じ女が後をついてきていた。人目を惹く美人なので目立った。一瞬畏であると感じたが、その女を捕まえてみようという気になった。誘いをかけてみることにした。地下鉄駅をやり過ぎし、近くの公園に向かって歩き出した。案の定、女はついてきた。公園の入り口近くにあるトイレに入る振りをして、植え込みに身を隠した。女の様子を窺った。突然、気配が消えた。背後から抱きつかれた。真理子は背負い投げを打った。見事に決まり女は、強かに背中を地面に叩き付けた。

「……中々やるわね」

アリサが、頬のかすり傷を擦りながら、立ち上がった。

「でもこれには敵わないわね」

何時の間にか、小型拳銃を手にしていた。スマートなシルエットをもつブローニング三八〇だ。真理子は拳銃を所持しなかったことを深く後悔した。

「……」

「さあ。バッグをよこしな」

真理子はアリサにバッグを放った。アリサはバッグの中から手銃を取出し、真理子に放り投げた。

「まず、左手にかけな。それから両手を後ろに回して右手にかけるんだ」

真理子は、言われたとおりにした。

「ゆっくり回って後ろを見せな」

後ろに回した両手に触られた。アリサは手錠が確実にはめられていることを確認していた。その手が次第に下に降りていき、ミニスカートの上から尻の膨らみをなで上げ、さらに太股の間に手を入れてきた。パンティの隙間から指が、進入しアヌスに深く差し込まれた。

「お前。いい身体しているね。肌も吸い付くように滑らかだ」

「……」

「お姉さんが可愛がってあげるよ」

突然、後頭部に衝撃を感じ、意識が遠のいた。

股間に異様な感じを覚え気がついた。少しの間、失

神していたらしい。公園のベンチに仰向けの姿勢で太腿を大きく広げられ、寝かされていた。股間に先ほどの女が、顔を入れ舌で性器を舐っていた。生暖かい女の舌が、膣口からクリトリスにかけて這い回っていた。包皮が捲られクリトリスを強く吸われた。シャツのボタンを外され、ブラジャーもなく見事に盛り上がった乳房が剥き出しにされていた。女の手が鷲掴みにして、こねくり回していた。

「気がついたかい？オマ＊コ汁も旨いね。遠慮しないで逝っていいからね」

アリサは真理子の太股を高く上げ、今度はサーモンピンクのアヌスに舌を深く入れてきた。小波のような快感が、湧きあがり声を立てそうになった。難解な数

学の問題を頭に浮かべ、必死に快感を押しさえようとしました。効果が見られはじめた時、乳房を強く掴まれました。

「気をやらないと殺すよ」

突然、臆内にこれまでの人生で感じたことのないような遺物感を感じた。

「あたいには、チ*ポがないからね。代わりにこれで逝かせてあげる」

異物感の正体は、拳銃の冷たい銃身だった。アリサは、指先でアヌスを刺激しながら、それをゆっくりと出し入れした。

「ああ。いい……」

突然、突き上げるような快感が沸き上がり、我を忘れた。アリサの手の動きに合わせて腰を揺り動かして

いた。

「駄目。止めて。いい……。逝く。いっっちゃう！」

身体が大きく逆海老反りになり、そしてガクンといった感じで果てた。きれいなピンク色をした臍から愛液が滴り落ちた。アリサがそれを舌ですくいあげた。

公園の近くに停車していたキャンピングカーには、下半身をむき出しにしたアリサと、全裸でアリサの股間に顔を埋め、舌で懸命に性器を愛撫している真理子が乗っていた。真理子は後ろ手に手錠を掛けられ、床に両膝をつかされていた。後部席のドアが開き、少佐が現れた。

「お帰り。少佐。お土産は？」

「逃げられた」

少佐はダークスーツの上着を脱ぎ、銃弾の痕が残る防弾チョッキを外した。

アリサは、いつもより口数が少ない少佐のズボンのチャックを開け、中身を引っぱり出して匂いを嗅いだ。

「牝豚の匂いがするわ」

「もう少しのところだったが、邪魔が入った」

「ふーん。まあ。仕方がないわね。私はこのとおり牝豚を一匹捕まえたわ。食べる？」

少佐はアリサの隣の席に腰掛けた。

「疲れた。少し休みたい」

「へー。この牝豚が気に入らないの？おい。お前。立

ちな」

中腰になった真理子をうつ伏せの格好で膝に載せた。アリサの目の前には白くすべすべした剥きタマゴのような大きな尻があった。アリサは真理子の尻の合間に顔を入れ、舌でアヌスを舐り始めた。

「あーん」真理子が喘ぎ声を上げた。

「気持ちいいかい。もっとよくしてあげるよ」

ブローニング三八〇の弾装を外し、三十八ACPの弾丸を七発取り出した。少佐に意味深な笑顔を向け、弾丸を一発ずつ真理子のアヌスに押し込んでいった。

「ああ。止めて。いや。痛い！」

空いている方の手で真理子の膣を刺激しながら、七発すべてを挿入した。弾丸をアヌスに挿入される度に、

剥き卵のようにすべすべの白い尻が震え慄いた。

「あんまり動かない方がいいよ。直腸がずたずたになるから」

隣で一部始終を見守っていた少佐が立ち上がり、ズボンを脱いだ。下着は付けておらず、屹立した長大な男根が現れた。それを真理子の膣に一気にねじ込み腰を使い始めた。アリサは真理子の重たげな乳房をこねくり回しながら、口に吸い付き、舌を入れかき回した。真理子はあまりの快感に我を忘れ、喘ぎ続けた。

「真弓。瞳から国際電話よ」

真弓は、受話器を取り立ち上がった。後ろを向き、窓外を眺めた。

「もしもし。真弓？」

「何か掴めた？」

「今、少し前にメールを入れたわ」

「ちよつと、待って」

真弓は受話器を胸の谷間に当て、

「美由紀。瞳からのメールが届いている筈なんだけ
ど」

と言った。美由紀はパソコンに向かい、起動しておい
たインターネットエクスプローラのメールボタンを
マウスでクリックした。

「届いているわ」

「届いているそうよ。聞こえた？」

「細かい内容はメールで確認して。手短かに話すわね。

フランス外人部隊には、過去から現在までに十名の日

本人が在籍していたの。その中で一名が現在、行方不明よ。もう二十年も前の事だけど。一九七八年五月、中央アフリカのザイール共和国シャバ州で反乱が起こつたのを知っている？」

「ええ。確か、二千の兵力で十八名のキューバ人軍事顧問に統率された反乱軍が進出した事件よね。反乱軍は数百名の白人・黒人を惨殺したというのを何かの本で読んだ気がするわ」

「それ。それよ。その時、日本人の将校がいて、有力なフランス人移住者を救出に向かって、部下とともに行方不明になっているのよ。写真をメールに添付したわ」

ちやうどその時、恵子がプリンタで印刷した男の写

真を真弓に渡した。

「今、見てるわ。顔つきがちよつと違うわね。でもこのくらいだったら整形で何とかなるわ。部下は何人いたの？」

「イタリア人とロシア人が二人よ」

「で、他に何か手がかりになるようなものは？」

「出身地が北海道札幌市というだけね」

この時、真弓の脳裏に閃くものがあつた。襲撃された銀行は東京都内に限られていたので、捜査は自然に関東周辺に限定していた。考えてみれば、車両でも二十四時間以内に北海道に行けるのだった。

「……」

「どうしたの？皆、元気？」

「……真理子が拉致されたの」

「えっ。無事なの？」

「わからない。敵からは何のコンタクトも無いのよ」

第六章 少佐

第七章 真理子

第八章 攻撃

第九章 対決

第十章 復讐

完